



筑紫女学園大学リポジット

The 2007 Joint Report of the Chikushi Jyogakuen
University and Kyushu National Museum
Preparation Committee

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 真也, MORITA, Shinya メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/428

九博連携準備委員会2007年度活動報告

森 田 真 也

The 2007 Joint Report of the Chikushi Jyogakuen University and Kyushu National Museum Preparation Committee

Shinya MORITA

1 活動報告

「九博連携準備委員会」は、2006年11月に正式発足したもので、委員長を中川正法文学部長とし、本学の田村史子准教授、時里奉明准教授、大津忠彦教授、森田真也准教授、緒方知美講師によって構成されている。そもそもこの委員会は、2005年に九州国立博物館がオープンするのにあわせて発足した、「博物館と大学の新しい関係を考える協議会」の後身にあたる。同委員会メンバーは、これまで本学と九州国立博物館、地域社会の新たな関係の構築と両者の発展を模索しながら様々な活動を行ってきた。その活動は、シンポジウム（「ようこそ！九州国立博物館〔開館〕—博物館と大学の新しい関係を目指して—」『国際文化研究所論叢』第17号：2006）、講演会、公開講座、研究会、ワークショップの開催、博物館実習、講義での活用など多岐にわたる。

2007年度はその延長として、以下のような公開講座と研究会を開催した。これらの開催に関しては、数回の事前打ち合わせ会議、反省会をもった。また、あわせて九州国立博物館のキャンパス・メンバーズの加入、広報・普及活動を行なった。このキャンパス・メンバーズとは、九州国立博物館と教育機関の連携協力を目的としたもので、会員校の学生・教職員には、文化交流展（平常展）の無料観覧、特別展の割引、年間パスポートの割引、レストラン・カフェ・ミュージアムショップの割引利用、会員校には刊行物の提供、施設利用・イベントにおける優先措置、博物館実習や講座などの優遇がなされる。この制度については、通常の講義などにおいて活かされているが、いまだ大学全体、学生に十分周知・活用されているとはいいがたく、今後さらなる利用の促進が望まれる。

公開講座の開催

- 1) 6月28日木曜日、14時50分から16時20分まで、スクワヴァティーホールにて。
平中英二(九州国立博物館副館長)「九博の目指すもの—アジア的視点から文化交流を考える—」
約150名出席。
- 2) 11月7日水曜日、14時50分から16時20分まで、8201教室にて。
木下達文(京都橘大学准教授)「博物館と地域連携—ミュージアムの未来像を求めて—」
約70名出席。

研究会の開催

- 1) 10月18日木曜日、18時から19時30分まで、飛翔会館3階会議室にて。
「博物館と大学の連携活動に関する意見交換会」
10名出席。
- 2) 11月7日水曜日、17時から19時まで、飛翔会館3階会議室にて。
「大学と博物館の連携を求めて」
基調発表：木下達文(京都橘大学准教授)
14名出席。

2 活動の成果

平中英二氏の公開講座では、前半、日本の国立博物館の歴史と実情について、さらには九州国立博物館の新たな取り組みが紹介された。後半は、インドネシアなどアジアの諸地域の文化財行政や博物館活動、文化交流の可能性が指摘された。

2007年度、大きな活動の成果は、木下達文氏を招いて行なわれた公開講座と研究会、さらには事前の意見交換会の実施である。木下氏の公開講座では、博物館と地域連携をテーマにして、博物館と地域ボランティアの活動が紹介された。さらにその後、本学の教職員、九州国立博物館の学芸員、地域ボランティアの方々と交えて、大学と博物館の連携を主題とした研究会を開催した。この研究会においては、京都橘大学と京都国立博物館の博物館実習、ボランティア解説をとおした連携、さらには木下氏自身がコーディネートした琵琶湖博物館の地域連携活動「はしかけ」などの事例が提示された。

木下氏によると、大学、博物館、地域が結びつく上で重要なキーワードとなるのは、第一に「つながろう」という意識の重要性とその持続による信頼の獲得、第二に人々に活動の場を与えるコーディネータの存在、第三に博物館と大学の組織的連携、第四に博物館と大学からさらに市民力を活用した地域振興への展開であるという。

このようなことは、本学と九州国立博物館の連携にも当てはまるものであろう。木下氏からは、本学と九州国立博物館の距離の近さと太宰府という場所の優位性、博物館側もしくは大学からの具体的な提案と要請、双方のコーディネータの必要性、複数の大学など教育研究機関とのネットワークの確立、福祉・観光・国際交流・町づくり事業とのリンクによる地域振興、本学卒業生を含めた市民活動やNPO・ボランティア組織との結びつきなどが、今後の可能性として提言された。

なお、事前の意見交換会においても、九州国立博物館をいかに普段の講義に利用するのかだけでなく、体系的な教育システムやキャリア支援に組み込むこと、学生を主としたプログラムやボランティア活動の推進の重要性などが意見として出された。

以上のような活動を踏まえ、同委員会のメンバーからは、大学として地域連携も含めた九州国立博物館やその他の博物館との組織的連携活動を求める声も上がった。大学と博物館の組織的連携は、新たな部局や委員会組織の設立、委員会メンバーの再編も念頭においたものであるが、早急な展開には困難な点が少なくなく、今後の課題となっている。

いずれにしろ本学と博物館との連携は様々な可能性を内包したものであり、さらなる発展が期待出来る。

〈付記〉

同委員会の活動は、生涯学習委員会の地域連携事業推進費「公開講座の実施（前期）」、「公開講座の実施（後期）」、「委員会運営費」、「九博キャンパス・メンバーズの加入と普及について」によるものである。

〈参考文献〉

全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 2008『新しい博物館学』 芙蓉書房出版
千地万造・木下達文 2007『ひろがる日本のミュージアム』 晃洋書房

(もりた しんや：日本語・日本文学科 准教授)